

# 聖書の学び／2007年

桑 栄 一

1月1日(神の母聖マリア) 私たちが聖書から聞く福音は、喜びの福音であって、次のように説明されています。「わたしたちには、御自身の血によってただ一度聖所に入って永遠の贖いを成し遂げられた大祭司が与えられていて、天におられる大いなる方の玉座の右の座に着き、人間ではなく主がお建てになった聖所また真の幕屋で、仕えておられるということです。」(ヘブ 8:1-2, 9:12) 神は、この御子イエスを律法の下に生まれさせるために、マリアをその母としてお用いになりました。私たちはマリアにこの最高の役割と尊厳を授けられた神を賛美し、現代の教会への豊かな神の祝福を、大祭司キリストに願い求めて歩んで行くではありませんか。

1月28日(年間第4主日) 新約聖書が語る“愛”は、“教会を造り上げる愛”、“教会共同体を愛する愛”であることを、在来のキリスト者は読みとり損ねて来たと言うことが出来ます。否むしろ、聖書を読まないから、理解出来なかったというのが正しいかも知れません。キリスト者の間で何かが論議されるときにも、そこで取り上げられるのはいつも、“前後関係から切り離された聖書の断片”でしかありませんでした。聖書を読まない信者にとって、関心事は“自分の信心”や“自分の救い”であって、“神が御子の血によって御自分のものとなさった神の教会”(使 20:28)ではありませんでした。しかし聖書は、「(教会を愛する愛という)もっと大きな賜物を受けるよう熱心に努めなさい」(I コリ 12:31)という、使徒の教えを現代に伝えているのです。

2月4日(年間第5主日) 神が聖であるという表現に、現代人は常に道徳的な意味を読み込んでいると、R・オートーは彼の著書“聖なるもの”の中で指摘しています。カトリック神学においても、通常“罪”とは道徳的な意味で理解されて来ました。“告解(ゆるし)の秘跡”についてのカテキズムの解説を読めば、それは明らかです。しかし聖書には、単なる罪悪意識や自然的恐怖とは別な恐れ(畏れ、怖れ)が描かれているのです。それは聖なる神に対する、神の怒りに対する畏怖であって、本来道徳的な性質とは無関係なものです。その一例として、ハバ 2:20 の「主はその聖なる神殿におられる。全地よ、御前に沈黙せよ」をあげることが出来ます。シモン・ペトロが体験したのは、まさにこの恐れでありました。

2月18日(年間第7主日) ダビデがサウル王に対して寛大に行動し、彼を殺そうとして執拗に追って来る王(王上 18:6-11, 19:1 参照)に手をかけることをしなかった、その理由はただ一つ、「主が油を注がれた方」(v.23)でありました。彼は博愛主義者でも、人道主義者でもなくて、イスラエルの神主を愛する“信仰の人”でありました。もし人が聖書から神のことば(キリストの福音)を聞きたいと願うなら、「信仰がなければ、神に喜ばれることは出来ません」(ヘブ 11:6)という不可欠な前提を理解する必要があります。聖書の中から拾い出された“名言”が、どんなに勝手に一人歩きしていても、それはもはや“神のことば”ではないのです。

3月11日(四旬節第3主日) しかし、多くの信者が“使徒たちが宣教した福音”を事実上学ぶことも理解することもせず、それとは無関係な現代の思想や価値観による“自己流の福音”をこれに置き換えて歩んで来ました。そこには裁きも滅びもなく、来るべき神の国の危機も存在せず、“その時に間に合うように悔い改める”という必要もありません。そのような歩みを続けて来た多くの信者にとって、聖書はもはや時代遅れの物語りを収集した昔の書き物、使徒たちが語った福音はもはや再解釈なしには現代に通用しないもの、と思われています。どこの教会でも“宣教”と称して、信者たちが主日のミサに訪れる新来者を親切にお世話するようにと努力しています。確かに皆さん、とても親切で良い人ばかりなのです。でも、

善意で人を救うことは出来ないのです。「福音を告げ知らせる」(使 8:4)能力がなければ、「盲人が盲人の道案内をすることが出来るか。二人とも穴に落ち込みはしないか」(ルカ 6:39)ということになります。

4月1日(受難の主日) キリスト教という宗教を、神の国を待ち望む(ルカ 23:51)ことから切り離された“地には平和”のための“世直し運動”のように考えている人々が、いつの時代にもいます。しかし、イエスがその志半ばで無念の死を遂げて中断した“貧しい人々の解放の福音”を、現代の我々が受け継ぐのだという理解は、聖伝と聖書が証言する“キリストの十字架の福音”(Iコリ 1:18, 2:1-2,8-9、ガラ 2:19-21, 6:14)とは、根本的に異質なものであることを知しましょう。

4月29日(復活節第4主日) 永遠の命とは、イスラエルの「先祖に与えられた約束」(使 13:32)であって、以前は異邦人には関係のないものでありました(エフェ 2:11-13)。しかし「今やイエス・キリストの復活によって」(Iペト 3:21)「信じる者は皆、この方によって義とされ」(使 13:39)、ユダヤ人と共に同じ約束を受け継ぐことが出来るようになりました(エフェ 3:6)。初代教会の人々は、この「秘められた計画」を、使徒たちの宣教する福音を通して聞いて信じました(コロ 1:5,26-29)。歴史の教会が、この同じ約束を受け継ぐ民として、キリストの福音による希望に生きて来たのは、使徒継承によるのであって、使徒たちは今なお聖伝と聖書を通して、現代の私たちにキリストの福音を語り続けています。

5月6日(復活節第5主日) 教会とは、このキリストが救い主として再び来られる終末の日を待っている共同体です。……この、キリストの昇天と再臨の間期の時代にある教会に、イエスは「新しい掟……互いに愛し合いなさい」(ヨハ 13:34)をお与えになりました。それは人がキリストの救いを受けた初めからの「古い掟」でありつつ、しかも日毎に「新しい」のです(Iヨハ 2:7-8)。なぜなら、それは洗礼の秘跡によってキリストの死に与り、新しい命に生きる者となった共同体の兄弟の間での掟であり(ロマ 6:3-4)、「共に(近づき来りつつある神の国の)恵みにあずかる者」(フィリ 1:7)への掟だからです。

5月20日(主の昇天) キリスト教を、過去のイエスと過去の使徒たちの思想に立ち帰って、それを現代的に再解釈することだと考えるのは、間違っています。教会を通して神の救済史は今も続行しており、教会は復活のキリストが現在支配しておられる“キリストにおけるいわば秘跡”(教会憲章 1)であることを、現代のキリスト者は見誤ってはなりません。……歴史の教会は、使徒後の時代の教会でありますから、神は今日に至るまでこの教会に使徒たちの証言を通して語り続けておられます。歴史の教会が存続する限り、この使徒たちが宣教した福音が規範であり続け、いかなる個人も、また組織としての教会も、その上位の規範となることはないのです。教会を通して神の救済史は今も続行しています。しかしその救済史には一つの中心点があります。この中心点とはキリストの誕生から最後の使徒(証人)の死までのことです。この期間の光によってだけ、私たちは御国の完成を待ち望む信仰を、“キリストにおけるいわば秘跡”である現在の教会への信仰を、共に保って進むことが出来るのです。

6月10日(キリストの聖体) 過去にカトリック教会では、どちらかという聖体拝領を個人的信心として、各自が恵みを受ける手段として強調していました。しかし今日、カトリック教会は典礼刷新によって、これを共同体の信仰告白として理解するようになりました。奉納祈願から始まって、交わりの儀の間、すべての信者の拝領が終わるまで、会衆は立っているようにと指示されているのは、この共同体がキリストの血によって贖われた神の国の民であるということの表現だからです(ミサ典礼書の総則 20,21)。拝領前の信仰告白は、司式者の拝領と会衆の拝領が分離されないようにとの配慮によるものであり(ユンクマン「ミサ」p.259)、拝領の歌を“司祭が拝領するときに始める”と指示されているのも(総則 56リ)、集会の共同体性と一致を表現するためなのです(同 20)。

7月15日(年間第15主日) 同様にキリスト教会も、それが“信者が互いに愛し合う共同体”であることを、私たちは当然のこのように教えられ、また一般にそう思われて来ました。しかし、本当にそうなのだろうかという疑問をもって、私たちがもう一度出発点に立ち帰って考えることを、主はこの譬え話で提起しておられるのです。“あなたは、身近なだれかの隣人になったか?”というイエスの質問に、私たちはどう

答えたらよいのでしょうか。カトリック教会のミサでは、開祭の部で会衆は回心の祈りを唱えます。「…  
… 聖母マリア、すべての天使と聖人、そして兄弟の皆さん、罪深いわたしのために神に祈ってください。」  
それでは、次のように質問することは、間違っているのでしょうか。「あなたは、兄弟の罪の赦しのために、  
神に祈ったことがありますか？」実にこの質問をもって今朝イエスは、私たち会衆の前に立っておられます。

7月22日(年間第16主日) ルカが、この伝承を用いることによって訴えようとしたのは、“御言葉に聞く”  
ことの大切さでありました。そしてそれは、当時の状況においては、“初代教会の宣教する福音に聞く”  
ことであったことを理解しましょう。異邦人世界に急速に成長して行った初代教会において、共同体とそ  
の集会のために世話をする仕事の量が増大したとき、それでもなお教会にとって“本質的に必要なこと  
はただ一つだけ”であることを訴えたのです。教会にとっても、一人一人のキリスト者にとっても、キリス  
トの福音に耳を傾けることは最も大切なことです。なぜならそれは「信じる者すべてに救いをもたらす神  
の力」(ロマ1:16)であり、キリスト教存続の「よりどころ」(Iコリ15:1)だからです。

8月5日(年間第18主日) 啓示の源泉が聖伝と聖書にあり、キリストの福音を使徒たちの証言を通して聞  
くということに公会議が目覚めたとき、それは正しいことでした。しかし、すでに久しく最前線で働く司祭  
たちも牧師たちも、神のキリストにおける啓示を使徒たちの証言から聞くという、神学的訓練から、無縁  
でありました。主日に説教をする司祭も牧師も、信者たちからは聖書の専門家のように思われていても、  
実際には全くの“素人”、“初心者”ばかりでありました。この事実を、私たちは受け入れるところから始  
めなければなりません。今朝の朗読配分から、使徒たちの宣教を聞き取り、使徒たちが伝えるキリストの  
福音を理解するのは、あなたがた一人一人なのです。今や、神のことばの前では、教導職と信者は同じと  
ころに立っているのです。

8月12日(年間第19主日) 現代においても私たち人間は、その生涯の終わりとして必ずやって来るであろ  
う老化、病、敗北と死、失望と墓場から逃れることが出来ません。そして、その本質は神による断罪と裁  
きであって、まさに創造者である神から“不要な者”として見捨てられることです。「死に定められたこ  
の体から、だれがわたしを救ってくれるでしょうか」(ロマ7:24)。しかし、キリストの福音は、この事実以上  
にさらに確かな“罪の赦しと贖い”、“復活と永遠の命”を、信じる私たちに与えます。その独り子をお与  
えになったほどに世を愛された神が、私たちキリスト者の神であるということ、それが“キリストの福音”  
なのです。

9月2日(年間第22主日) “へりくだる”とは、何よりも先ずキリストの御業のことでありました。キリストは  
神でありながら、人間と同じ者になり(受肉)、十字架の死に至るまでへりくだって贖いの業を成し遂げてく  
ださいました(フィリ2:6-11、ヘブ5:7-10)。人はこのキリストの贖いの業を信じる信仰によって、無償で義  
とされるのであり(ロマ3:23-25)、ただ恵みにより、信仰によって救われた(エフェ2:8)私たちからは、誇り  
が取り除かれました(ロマ3:27)。これがキリスト者の“へりくだり”なのだということを、福音書は訴えて  
いるのです。先ず、キリストの“へりくだり”があって、その受肉と十字架の贖いの業を信じて“恵みに対  
してへりくだる”キリスト者が、復活の日に報われると、使徒たちは宣教しました。

9月16日(年間第24主日) 私たちは異邦人キリスト者ですが、その異邦人という呼称そのものが罪人(神か  
ら離れている者)を意味することを、どれだけ理解しているのでしょうか(ガラ2:15 参照)。キリスト者になる  
とは、自分の罪を忘れてしまうことではありません。そうではなくて“わたしたちの罪のために死に渡され、  
わたしたちが義とされるために復活させられたキリスト”(ロマ4:25)を信じることであり、神に立ち帰  
ることです。神はユダヤ人を信仰のゆえに義とし、異邦人をも信仰によって義としてくださいます(ロマ  
3:30)。私たちキリスト者は、ユダヤ人に対して思い上がりはなりません(ロマ11:20)。

10月7日(年間第27主日) 使徒パウロは、福音が“土の器”のような弱い人間に委ねられたのは、「この福  
音の並外れて偉大な力が神のものであって、わたしたちから出たものでないことが明らかになるため」で

あると言いました(Ⅱコリ4:7)。私たちに求められているのは、福音を告げ知らせることであり、“しかも、キリストの十字架が空しいものになってしまうように”(Ⅰコリ1:17)、人の知恵によらずに宣教することです。そのためには、信徒一人一人が教会に受け継がれて来た福音を、自ら学ぶという自覚を持たなければなりません。聖書を学ぶことは、どんな政治活動や社会活動と較べても、はるかに大切なことなのです(ロマ6:17、Ⅰコリ11:2, 15:1-4、ガラ1:8-9、Ⅱテサ2:15、Ⅱテモ2:2, 3:14)。

10月21日(年間第29主日) 使徒たち自身も、キリストの再臨や神の国の到来について、科学的学問的に説明したり証明したり出来はしませんでした。しかし、彼らは聖霊の働きと、復活の主に導かれて、“受けた福音”(ガラ1:11-12)を宣教したのです。ですから、それは神からの福音であって、この世の知恵や学問の産物ではありませんでした。どんなに時代が隔たっても、私たちが“使徒たちが信じたように信じる”という姿勢で聖書に向かうことは可能であり、それがいちばん確かな福音理解への早道です。私たち教会が使徒たちから受け継いだ福音は、イエス・キリストの出現とその御国とを思いつつ、語られまた聞かれねばならないのです。

11月11日(年間第32主日) キリスト教とは、地上に(この世に)神の国を実現する(造り上げる)ことを目標とする宗教だと考えている人は、“聖書も神の力も知らない”(マコ12:24)のであって、そのような人にとっては“救い”も“信仰”も、単に自分が生きている間だけの精神的な“癒やし”でしかありません。そのような人には、キリストの再臨と神の国の到来を“忍耐して待ち望む”などということは、理解出来ないのです。……教会憲章は、神の国と教会を区別して次のように述べています。「教会は、神の国の地上における芽生えと開始となっている。」(5)「その国は神自身によって地上に始められたが、…… については世の終わりに、我々の命であるキリストが現れるとき、神によって完成される。」(9)

11月25日(王であるキリスト) イエスが受難のためにエルサレムに入られたときの群衆の叫びを、マタイは「ダビデの子にホサナ」と書き(21:9)、マルコは「我らの父ダビデの来るべき国に、祝福があるように」と述べました(11:10)。かつてイエスの受難の出来事を、他人事のようにしか考えなかった私たち異邦人が、悔い改めて神を畏れる者となり、今やユダヤ人と共に神の国を受け継ぐという希望に生きるようになったのです(エフェ3:6)。歴史上のダビデ王国がそのまま神の国であったわけではありませんが、それは今なお、イエス・キリストの再臨によって実現する来るべき神の国を指し示すものであり続けています。

12月2日(待降節第1主日) キリストの救いは、罪と死からの救いです。それは、「憐れみ豊かな神は、わたしたちをこの上なく愛してくださり、その愛によって、罪のために死んでいたわたしたちをキリストと共に生かし、……」(エフェ2:4-5)と書かれている通りです。世の終わりにキリストが来られる日は、私たちが復活する日であり、そして最後の敵として死が滅ぼされる日です(Ⅰコリ15:26)。ですから、教会は典礼暦の新しい年を迎える度ごとにいつも新しく、「夜は更け、日は近づいた」(ロマ13:12)という使徒の言葉を聞いて、信仰の目を覚まします。

12月30日(聖家族) マタイ福音書の誕生物語りの際立った特色は、母マリアではなくて夫ヨセフが主人公だということです。彼は夢の中で神からの指示を受けます。マタイの用語法では“神が語られた”と言う代わりに“主の天使が”という表現を使います。ヨセフはそれに服従し、その結果「主が預言者を通して言われていたことが実現」するのです。……教会とは、イエスキリストを信じて神のことに聞き従う共同体であり、神のことは教会の歩みと共に実現して行くのだと、マタイ福音書は教えました。神の国を受け継ぐのは、切り離された個人ではなくて、教会という共同体なのです(6:33, 21:43, 25:34 参照)。ですから、この福音書から聖家族の私的な面での体験談を聞こうとするなら、それは的外れたことであると知りましょう。